

Principal Correspondence

「なんで『げんき会』をやるの??？」

幼児(3~9歳)はひとつの部屋に集めるとすぐ仲良くなって遊び始めるものです。警戒感なく、すぐ無邪気に遊ぶのですが、ひとつの部屋に子どもの数を多くすると次のルールに則って自然とグループに分かれていくと言います(「言っではいけない 残酷すぎる真実」新潮新書、橘玲著)。

- ①年齢・幼児は自分より少し上の子どもになつき、年の離れた子どもには近づきません。年長の子も少し下の子は仲間に加えるがそれより下の子は無視します(あくまで自発的な遊びの場合です)。遊び方が異なるし、小さい子のレベルは面白くないからです。
- ②性別・思春期前になると男女別々のグループに分かれるようになります。お互いに興味をもちません。性別で興味が異なるし同じ遊びをしてもつまらないのです。

ヒトの脳は数百万年前の石器時代から大きく変わっておらず、言い換えると原始時代の脳で、現代のアスファルトジャングルを生きていると言われています。正常に脳が発達するためには進化適応環境(子どもの脳が発達するために、あらかじめ予期されている環境)に子どもを置いてやる必要があります。



石器時代よりヒトの子どもたちは、成人の男は狩りに、女は木の実などの採取に行っている間、集落で男女別れて、年齢の近いグループを作り、年長の子が年少の子を面倒みることで、親の肩代わりをすることが期待されてきました。ここでコミュニケーション能力が獲得されました。思春期を迎える頃までにこの子どもの世界を充分経験させないと、人間力が獲得できないのですが、現代社会では、同学年同士でしか遊ばず、塾や、習い事、知的発達の偏重などでそうした環境がもてません。

最近生活環境の変化で最も著しいのは、家でも、学校でも異年齢の子どもと混じって遊ぶ環境がなくなり、脳の十分な発達環境がもてなくなったことです。よって特に「コミュニケーション能力」の低さが目立ってきました。この能力も10才頃(臨界期)までに獲得しないとそれからでは遅いとも言われます。

よってリリーバールと幼児部門では幼小での「げんき会」を通じて4~9歳ぐらいの年の近い子どもがふれあう中で、面倒をみたり、みてもらったりする経験の場を設けています。小学校ではハウス活動を通じて異年齢の児童が協力し合い、さらには6箇所の学童保育を通じて6~12歳の触れ合う場を創りだしています。

子どもの人間力は(コミュニケーション能力やキャラクターは遺伝的な要素を土台として)友達関係の環境の中で作られていくのです。

Principal Correspondence

「働く意味について」

「人は何で働くか？」という問いに、多くの人が様々な答えをもっていることと思います。簡単に言うと、お金をもらって働く人を「プロフェッショナル」といい、報酬をもらわないで働くことを「ボランティア」といいます。これはどちらも尊い…。職業つまり、プロフェッショナルの第一の目的は「報酬」です。人は食べなければ生きていけない。生存は第一。お金は少々でも多いに越したことは無い。だからといって、人は何でも報酬さえあれば働くか？下記は百年前の英国ロンドンでの南極探検隊員募集の広告。

〈南極探検隊員募集〉

求む隊員。
至難の旅。
わずかな報酬。
極寒。
暗黒の日々。
絶えざる危険。
生還の保障はない。
成功の暁には名誉と賞賛を得る。



隊長アーネスト・シャクルトン卿によるこの広告で5000人の若者が応募し、優秀な隊員をリクルートでき、探検隊は数々の困難を乗り越え一人の犠牲もなく越冬を終了したと言います。

働く意味には「報酬」ばかりでなく、「社会への貢献」や「自己の成長」の意味も大きいらしい。むしろその「意味」が強ければ強いほど、人は生きがいを感じ、幸福感を得るらしいのです。